

◆技術交流事業

アオリイカ人工産卵床の効果について

山田 真之

1. 目的

沖縄本島西部に浮かぶ渡名喜島は漁業の盛んな島で、アカマチなどの一本釣りを主体に漁業を行い那覇の県漁連市場に出荷を行っている。またこの島の周囲ではアオリイカが多く漁獲されているが、そのほとんどは島内消費である。

平成14年からアオリイカの資源を維持しながら漁獲を続けていくために、渡名喜村漁協の協力を得ながら水産業改良普及事業としてイカ柴（人工産卵床）の設置及び採卵の試験を行ってきた。平成15年からは粕谷製網の協力を得てアオリイカ人工産卵床の試験設置を行っている。

今回の視察ではアオリイカの漁獲が多く、また渡名喜島で試験されている粕谷製網の産卵床を多数設置し、産卵が確認されている鹿児島県の種子島を訪ね、現地の状況及び方法に関し意見交換を行う。

また渡名喜島では島の東側の礁湖（イノー）の中でヒトエグサ（アーサ）の養殖が行われているが、鹿児島市の南に位置する喜入町（鹿児島市喜入町）でもヒロハノヒトエグサ（青ノリ）の養殖が盛んに行われていることから、併せて現場視察を行う。

2. 交流先及び日程

平成17年

3月22日 移動日（西之表市へ）

3月23日

8:00 種子島漁協セリ見学

9:00 意見交換

10:00 設置現場視察
鹿児島市へ

3月24日

9:30 喜入町漁協で意見交換

11:00 ヒトエグサ養殖視察

帰沖

3. 参加者

渡名喜村漁協

筆頭理事 比嘉 文雄

理事 比嘉 孝

理事 南風原 正治

水産試験場普及センター

主任 山田 真之

技師 小澤 明子

4. 交流内容

①アオリイカ人工産卵床視察

種子島漁協では漁協の脇田哲郎業務課長と漁業者の横林伸英氏、鹿児島県熊毛支庁の徳永成光技術主査と竹丸巖技術主査に対応して頂き、意見交換を行った。

種子島漁協の総水揚げは8億5千万円（平成15年度）で、そのうちアオリイカ（水イカ）は7,700万円（42t）を占めている。平均単価は1,800～2,000円/kgである。種子島では周年釣れるが2～6月によく釣れ、特に4～6月は3～4kgサイズの太ったイカが釣れるようになる。4・5・10月は午後10時から朝4時までの夜間禁漁を行っている。産卵期にはポイントがあり、そのポイント以外ではほとんど釣れなくなってしまう。漁法はパンカーで船を流しながらの餌木か餌でのしゃくり釣りである。

種子島でのアオリイカの産卵床設置は以前から行われていた。漁協が主体で設置していた頃はマルハニッケイという海岸近くにはえる木の枝を切り、土嚢をくくりつけて海中に投げ入れていた。年間400～500個も投入していたため景観を損ない、森林破壊にもつながると懸念されたことから、平成15年に西之表市が事業主体となり県単漁場施設整備事業（増殖場造

前垣

7 11/17
5.9 23.2
1.0 35.4
5.2 5.2
7.9 8.4

成事業)で粕谷製網株式会社の粕谷式イカ産卵床80基を導入し、試験を行った。

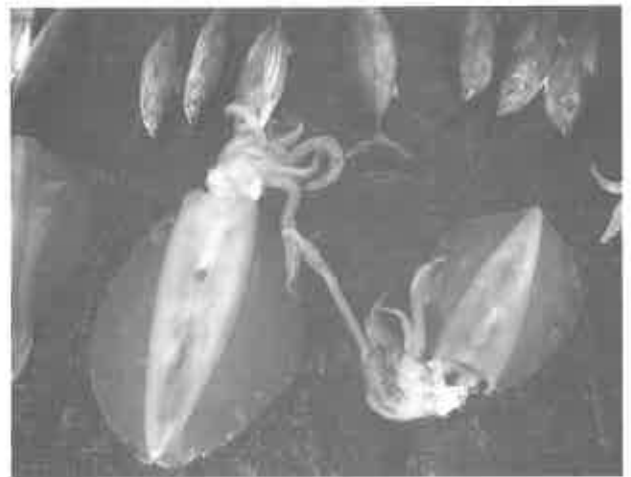
試験海域は西之表市中心部から北に位置する大崎という地域で、定置網の垣網に良くアオリイカの産卵が確認される場所である。20m間隔で10個粕谷式イカ産卵床を延縄式に着けた連を8つ、水深16~24mのところに陸地と平行に設置した。平成16年3月末に設置し、5月に調査した際には数カ所でアオリイカの産卵が確認されただけであったが、7月の調査・引き揚げ(台風の襲来前)の際にはほぼ全部の産卵床に産卵が確認できた。平成17年も視察に訪れる少し前(3月10日)に天気の都合で設置を終えてしまったとのことであった。

あいにくの天気のため直接現場に行くことはかなわなかったが、竹丸技術主査の案内で大崎まで行き、定置網業者の平原氏から設置等について意見を伺った。平原氏の定置網のすぐ側に産卵床が設置されていることから、平原氏が潜水調査を行っているとのことであった。平原氏の話ではマルハニッケイを使用して作ったイカ柴には設置数日後から産卵が見られるが、粕谷式イカ産卵床は設置してしばらくしないと産卵が見られないという話であった。また産卵床はそこから浮き上がっているとあまり良くなく、砂に埋もれて固定されると良く産卵が見られるとのことであった。産卵床を設置する場所は瀬(岩)の側の砂地が一番良い。昨年の結果では陸側の方に良く産卵が見られたことから、今年は陸側に寄せて設置した。

②青ノリ(ヒロハノヒトエグサ)養殖視察

喜入町漁協の坂元國茂組合長と元鹿児島県水産業改良普及所長で現在は青ノリの養殖を行っている中間健一郎氏に対応をして頂いた。

喜入町は錦江湾に面した遠浅の海岸線を有し、沖合1,000mの地点でも水深は10mぐらいのところもある。埋め立てしやすいため日本石油の中継基地が建設されている。その地形を利用して昭和33年から養殖が始まっている。それ以前まで漁協の婦人部が天然物を採っていたが、試験的に網1~2枚から始めて徐々に規模が拡大していき現在18名が養殖を行っている。



市場に揚がったアオリイカ(水イカ)



漁業者の横林氏(中央)と徳永技術主査(右)



漁具に関する技術交流

9月の下旬から天然の種を利用した種付けをはじめ、11月頃から本張り、12月中旬から4月上旬までの間に6~8回ほど収穫を行う。喜入町では鹿児島大学の調査で9月中旬から11月まで平均的に種が出ているのがわかっ



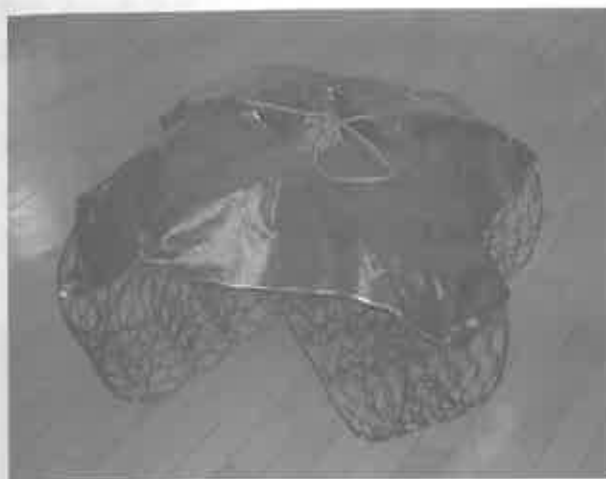
り)



査(右)



の種付け
月中旬か
収穫を行
月中旬か
がわかっ



粕谷式イカ産卵床

ている。網は有明海から海苔の中古網を1枚300円で購入をしている。養殖中の管理としては3日に1回汚れを振り落とししたり、ポンプで洗ったりしている。雑藻が多いときには網を日に干したり、淡水につけたりする。収穫は海苔摘み機を使用しており、収穫後陸上で選別機にかけてゴミを落とす。選別機は海苔用の中古機械で、3グループで共同購入・共同使用している。繁忙期は脱水後まとめて冷凍しておき、4月以降に解凍して個別包装を行う。値段は100g100円を基本値段として販売している。包装も内容量も現在はバラバラで販売している。

中間氏は他の地域の青ノリと喜入の青ノリを差別化していくのに時間がかかったと話していた。今後は漁協に協力してもらい、喜入町漁協の生産者の中での品質のばらつきを無くし、値

5. 所感

渡名喜島でもこれまでアオリイカ産卵床の設置試験を行ってきたが、設置場所が悪かったためか産卵が確認されていない。種子島で得られた情報を元に現在産卵床を深い地点に設置しているので結果を期待したい。

またヒトエグサは全県的に不足気味で生産の拡大が期待されているうえ、高齢者でも作業が容易であることから渡名喜島でも発展していく可能性は充分ある。喜入町の漁業者のように共同で機械を購入・使用しながら養殖が出来るよ

うに今後話し合いを行っていきたい。
段・規格を統一していきたいとのことであった。



坂元組合長(左)と中間氏



青ノリ養殖風景